

世界の中心で研究を行う意義と意味

リハビリテーション研究科 大嶋 伸雄

大阪河崎リハビリテーション大学・大学院リハビリテーション研究科修士課程は、2024年3月末に重要な節目となる修士課程の完成年度を迎えます。第一期修了生の皆様には、修士号取得に際し、心よりお祝いを申し上げます。

さてこれは一般論ですが、何のために大学院に入学したのかと問われれば、多くの院生達は「学位を取得しに来ました」と語ることでしょう。さらには、上位の博士号取得を目指すため、という意味も大変素晴らしい事だと考えます。しかしながら、まず、学位には責任も付帯することをお伝えしたいと思います。つまり、修士論文を書いたから修士号ホルダーになれる、のではありません。研究論文を作成できる人となったから修士号ホルダーになれた、ということなのです。でなければ、研究論文などは他人が書いたものを横領するだけで学位が取得できる事にもなりかねません。修士号とは、そのホルダーは研究ができる人、という大学院が発行する一種の証明書なのです。おそらく修士号を取得された方は、それまでに育んでいた社会観、人生観も大きく変化したことでしょう。それは人としての進化、進歩に他なりません。

幕末の長州藩（山鹿流）兵学師範で松下村塾を開いた吉田松陰という人物がおります。松下村塾の塾生がある時、自分たちは京都・大阪、そして江戸からはるかに遠い僻地にいることの不便さや不愉快さを大勢の前で嘆いたことがあります。その時、松陰は「地球は丸い球の形をしている。世界の中心地とは君たちが今、立っているここ、萩の町なのだ」と説教しました。この思考は、われわれが今いる現代にも通じます。世界で行われている様々な研究の中心地は？などという言葉に影響されて、欧米の有名大学やその機関が研究の中心地であるような幻想を持っている方がおります。しかしそれは、各自のスキーマ（思考の構え）による思い込みにしかなしません。世界の著名な研究の多くは大都市ではなく、田舎の普通に存在している大学の小さな研究室や実験室、または民間の研究施設などから生まれています。彼らにとっては、そこがその世界の研究の中心地なのです。

すでに私が何を言わんとしているのか、皆さんはお判りだと思います。それは本学にとっても同様なのです。皆さんが研究を行っている大阪河崎リハビリテーション大学リハビリテーション研究科がある大阪府貝塚市水間が世界の中心になります。

そして、研究は誰のために行うか？これも大きな課題です。広義には世のため人のための社会貢献として捉えることが一般的です。狭義では個人的探求心、好奇心を満たす行為になるかもしれません。しかし教員は責務として日常的に専門教育に従事し、同時に研究業績で個人評価されるという、良し悪しは別としてそういった課題を背負っています（欧米では教育職と研究職とに分離している場合が多い）。その一方で、委員会活動や大学の広報・学生募集に係わる活動などの雑務もこなさなくてはなりません。研究活動という膨大な時間を必要とする活動をついつい避けようとする心理に陥ることも多いでしょう。しかし、研究とは教員個人の知的好奇心を表現する手段です。知的好奇心を持つ人間で、物事にあまり前向きではない方を私はほとんど見たことはありません。

私の専門である作業療法の中心理論の一つに「作業バランス」という概念があります。主に義務と願望とで分類され、様々な活動がどちらかに偏っていないかに考慮しつつ、健康で役割感のある日常生活を目指すための指標となります。これを単純に言い換えれば、職場からの要請（社会的規範や義務：外的期待）と研究者としての教員の価値観（興味、自己効力感など内的期待）の兼ね合いの中から意思決定がなされ個々の役割感が醸成されていきます。いずれにしても教員の主体性が維持され、健康である限り世界の中心で研究を行う事が可能なわけです。また、それとは逆に性格的に内向的すぎたり、強いスキーマに支配されていたりすると、他者からのやらされ感が強くなり、教員個人としての作業バランスが徐々に低下してしまう可能性もあります。

世界の中心で教育や研究を続けるためには個人としての強さと探求心、そして教育に研究を反映させることが可能なバランス良い仕事環境が必須となります。そうした感触を全ての教職員と学生が持ち続けて、行き交う人々が常に笑顔でいられるような大学環境へ進化・発展することを心より願っています。